

共有した時間と空間

宮崎県立延岡星雲高等学校 二年 児玉 駿

大好きだった曾祖母が亡くなって、早三年が経つ。個人的にはまだそこまで時間は経っていないように思えたが、先日カレンダーを眺めていて時の早さに驚かされた。

小さな頃から曾祖母と遊んでいた私は、大人しい性格だったので家の中にいることの方が多く、絵を描いたり本を読んだりしていた。実家の近くに曾祖母の家があったこともあり、親と一緒にいる時間は少なく、一日の大半を曾祖母の家で過ごしていた。小学校に入学してからは、高学年になるにつれて徐々に曾祖母の家を訪れる回数は減っていった。また、曾祖母の体力も衰えてきていたため、実家の方と一緒に夕飯を食べたり、遊んだりしていた。

曾祖母は、基本的に怒ったりするような人ではなく、いつも穏やかに笑って周囲を和ませるのが誰よりも上手だった。相手の話を聞く時は楽しそうに笑ったり、悲しそうな表情を見せたりと、常に寄り添うようにして聞いていた。そんな曾祖母の優しさが、私は大好きだった。

やがて中学校に入学した私は、最初こそ学校生活を楽しんでいたが、次第に同級生との関係性が悪化していった。一年生の二学期中頃、私は身体的にも精神的にも限界を迎えていたらしく、清掃中に突然左脚の感覚が失せて倒れた。後で病院で診てもらったところ、自律神経低血圧症になっていたことが分かった。学校でのストレスが原因だったのだ。当時の担任の先生や周囲の友人のおかげで回復できたものの、発作や痙攣は未だに続いている。

一年生の三学期も終わり、春休みになったので家でゴロゴロしていた私は、あることを思いついた。「お花見」に、曾祖母を連れていくことだった。小さな頃から地域のお花見によく連れてってもらっていたのだが、曾祖母の健康面を考えてしばらくの間行っていなかった。妹も連れていくことになり、二人で交代で車椅子を押しながら近所の公園に向かうと、キレイな桜が沢山咲いていた。曾祖母も久々に見る桜を楽しそうに眺めながら、そっと呟いた。

「キレイやね……見られて良かった」

と。その一言を聞いた時、私はとてつもなく寂しい気持ちになった。まるで、桜を見

るのが最期だということを示しているような気がしてならなかったのだ。ほんの少し、私は涙を流した。理由も分からず、涙を流した。曾祖母の隣で二人並んで桜を見上げながら、私もそっと呟いた。

「大丈夫。来年もきっと見られるよ」

曾祖母は笑って、私を見た。

「ありがとう」

そう言って、私の手を握ってみせた。その時見せた曾祖母の笑顔は、今まで見てきた中で一番優しかった。

それからすぐに二年生に進級した私は、修学旅行のしおりの表紙に使うイラストを描く仕事を任された。京都に行くことになっていたので、金閣寺を描くことにした私は曾祖母に、「完成したら必ず見せる」と約束したのだった。しかし、四月の末に私はインフルエンザになってしまったので家で静養することになった。そして四日が経った頃、曾祖母が吐血したらしく病院へ運ばれていった。私も翌日には外出が許され、すぐに病院へ向かったが、もう長くはもたないと言われた。一時間、二時間と声を掛け続けたものの、曾祖母は静かに息をひきとった。

亡くなった直後、曾祖母の表情を見ると、穏やかな笑みを浮かべていた。いつも傍で見ていた、優しい笑顔だった。涙が溢れ出して止まらなかった。亡くなる瞬間まで笑顔を絶やさなかったのだ。そう思う度に涙が溢れて苦しかった。見せると約束していた絵も、完成したのが亡くなって一ヶ月後だったので、仏壇の前で見せることになった。生きている間に見せることができていたら……。もっと沢山話していれば……。と、後悔した私はショックのあまり食欲が湧かず、人との会話も少なくなった。曾祖母が亡くなって、立ち直るのに約半年ほど掛かったが、その間に気づいたことがある。それは「一緒にいられるのは決して当たり前のことではない」ということだ。同じ時間、同じ空間を過ごしている中で、相手と言葉を交わし、心を通わせるという行動は普通のことではなく、一生に一度だけの、とても貴重なことなのだ。話す相手が同じでも、その時に応じて会話の内容は変化する。その人と共有した「時間」と「空間」はその場限りのものであって、二度と戻ってはこない。

今、私はこのことを意識して日々生活している。一瞬、一瞬を大切に。そう、曾祖母が教えてくれたのだ。